

## 2022年度新任教員自己紹介

2022年度に人文学研究科言語文化学専攻には、新たに4名の専任の先生方がご着任されました。ご経歴とご専門について紹介していただいております。

### ◎超領域文化論講座講師 ガデミアミン先生

私は、近代日本のグローバル思想史と文化史、いわば「近代日本のグローバル精神史」を研究しています。特に明治前期における政治的・社会的無秩序の思想的側面に注目しています。研究自体は楽しいですが、革命や内戦、テロリズムなどの歴史的起源について日々考えるのは、まあ、快くないと申しましょうか。

この不愉快な研究の中には何らかの建設的な意義があると信じたいです。少し大げさな言い方ではありますが、「明治」という状態、つまり、近世秩序の急激な崩壊による革命的な思想的混乱の真っ只中に存在していくという状態は、人が全てのことを根本的に考え直さざるを得ない状態だったでしょう。皆が同じように同じものを考え直したわけでは当然なかったのですが、全体として、人生（と申しますか、人の生だけではないですね）のあらゆる側面が徹底的に再検討されたのは「明治」だったでしょう。

研究を始めたばかりの頃、私は植木枝盛という明治前期の非常に影響力を持った思想家について興味を持ち始めました。植木は、何と言いますか、癖の強い人でした。（彼は内戦とテロリズムにも関与したのですが、その話は省略させていただきます。）植木は自分が、否、自己という存在そのものが、大好きでした。また、全世界をアメリカのように一つの合衆国にして、その上に無上政府を置くべきだと主張しました。この二つのことは関係ないように見えるかもしれませんが、植木にとっては密接に関係していました。30代で亡くなった植木は、全国の思想的動乱の最中、世界の一番大きな地理政治学的な問題をも、自己という最も私的な問題をも、若いにもかかわらず、いっぺんに深く再評価していったのですね。人間とは何なのか？グローバルな世界において、人間として在るのはどういうことか？歴史を振り返って、植木のような、私たちの思想的祖先と一緒にこのような重い問題を考えていくのは、たまに心苦しいですが、非常に刺激的ですし、いかに細やかであっても何らかの善につながるのではないかと望んでいます。

私は、豊中キャンパスから1時間半くらいのところに生まれ育ちました。子供の頃、将来阪大の教員になるとは一回も想像しなかっただけではないです。阪大はどこにあるのかさえ意識していませんでした。キャンパスに初めて来たのは、阪大にコミットした後でした。ローソンで冷凍ピザを買って、理系の皆さんがいつもバーベキューをやっているところに座って、ピザを楽しくいただきました。阪大のピザうめえなっと思ったのを、鮮明に覚えています。

## ◎超領域文化論講座講師 鈴木啓峻先生

2022年の10月に着任致しました、鈴木啓峻と申します。神戸で生まれ、滋賀県大津市で育ち、中高は奈良、大学は京都に通っておりました。このように生まれてからずっと狭い近畿圏に生活して来たので、様々な文化的背景と関心をお持ちの先生方、学生さんのいる職場で働くことができるのを、とても有り難く思っております。

私の研究分野はドイツ文学で、研究対象としてはトーマス・マンという20世紀の作家に主に取り組んでいます。しかし私がドイツ語を本格的に学びマン研究に携わるようになる経緯には、紆余曲折がありました。そもそも私は文学部の学生ではなく、学部は京都大学の法学部に進学しました。法学部に入ったものの、六法を中心とする法律系の授業には興味を持つことができませんでした。振り返ってみると、法律学というのは大人の学問で、社会経験のほとんどなかった私が馴染めなかったのも、あるいは当然かもしれません。そんな中、単位取得のために出ていたある政治学系の講義で、文学研究へのきっかけを得ることになります。それは、小野紀明先生が担当されていた年間8単位の政治思想史という講義でした。政治を考える上で人間の全体的な理解が欠かせないというモットーの下、狭義の政治哲学のみならず、文学、芸術、思想を縦横無尽に取り上げた先生の講義に、私はすっかり魅了されてしまいました。もう一つのきっかけは、単位を落とすため (!) 三回生で履修したドイツ語中級のクラスです。これは後の指導教官となる人間・環境学研究科の大川勇先生が担当されていた授業で、フリードリヒ・ゲオルク・ユンガーというマイナーな作家の書いた短篇小说を講読するという内容でした。それまで私は、英語と同じゲルマン語派に属しながら、英語とはかなり異なるドイツ語という言語に対して、得体の知れない印象を拭うことができずにおりました。しかし、詩人でもあるユンガーのドイツ語は、硬質でありながら抒情的でもあり、辞書を首っ引きで読むしかない私にも感じることでできる美しさを湛えていました。またこの授業の中で、Fr. G. ユンガーは、「保守革命」の思想家としても著名な戦争文学者エルンスト・ユンガーの弟であるということも知りました。「保守」でありながら「革命」でもあるというこの奇妙な概念は、ヴァイマル時代の思想的混乱の中から生まれたものであり、政治と文学の間で無視できない影響力を発揮したことも、この授業で初めて知ったことです。

そこから保守革命に関する本をちらほら読む中で、トーマス・マンの『非政治的人間の考察』（前田敬作・山口知三訳）というエッセイに出会います。マンが『ヴェニスに死す』や『ブッデンブローク家の人々』などで有名な小説家であるということは、一般的な知識として知っていましたが、このような政治／文学的エッセイを書いていることは全く知りませんでした。このエッセイは、第一次世界大戦中のナショナリズムの高揚の中で、マンが〈ドイツ〉とその文化に対する愛着と批判に引き裂かれて書いた長大な作品です。それは、目眩を催させるような重層的イロニーに満ちたエッセイで、当時も今も、どれだけ正確に理解しているかと問われれば心許ないところがあります。しかし、これ以来私は、自らの中に抱える矛盾と格闘するマンの文章の毒にすっかり当てられてしまいました。私がマンから離れられないのは、矛盾を矛盾として受け入れようとするマンの「誠実さ」（悪く言えば「優柔不断さ」）にどこか共感しているからだだと思います。

このような人間として、ご縁を頂いた阪大で、学部生、先生方、院生の皆さんと今後も様々なテーマについて対話できるのを楽しみにしております。

## ◎言語認知科学講座講師 中畷 浩貴先生

2022年9月に言語文化学専攻言語認知科学講座に着任しました。学部生向けの英語の授業と、大学院生向けの認知言語学の授業を担当しています。

滋賀県出身で、大学の学部まで滋賀におりました。大学院進学をきっかけに神戸に移り、神戸大学大学院の在学中にアメリカのテキサス州ヒューストンに留学したほか、大学院の修了の前後では、勤務校の関係で三重や島根に何年かずつ住んでおりました。田舎が好きで趣味の1つが魚釣りのため、いろんな地方に行けるなんてなんてすばらしいだろうと私は能天気にも考えておりました。ご縁があり現在阪大で勤務しておりますが、私なんぞには恐れ多いという気持ちがいまだに拭えず、しかし勤務するからにはしっかり頑張らないといけないという気持ちを胸に勉強の日々を過ごしております。

こんなことを言うのは気が引けるのですが、実のところ、私は英語学習で良いスタートを切ったわけではありませんでした。確か中学1年生の早くにbe動詞と一般動詞を習ったのですが、その2つの何がどう違うのかがうまくつかめず、英語学習のはじめからつまづいたことをよく覚えていません。それは分からないという感覚を初めてくっきりと明確に覚えた瞬間でもありました。そのとき私は、授業を受けて分からないことがあれば本を読んで調べるしかない、それでも分からなければ自分で研究して明らかにするしかない、という極めて安直な考えを持ちました。しかしそれは大学教員として働く現在までつながっています。ある意味で、単純明快だったからこそ、人生の羅針盤として機能したのかもしれない。

日頃授業を教えているなかで重要だと考えていることの1つに、「その学びにリアリティーがあるか」ということがあります。これは、「当事者意識を持つ」とか「自分のこととして考える」とかと言い換えることができるかもしれません。英語が得意ではなかったということは、私にとって学びにリアリティーをもたらしたものの1つとなりました。当時の私にとって、何とか自分で乗り越えていかなければならないと覚悟を決めることになったのです。英語を学ぶ際に自分にとってリアリティーがあるというのには、ほかにも様々な形があり得るでしょう。生活や仕事の役に立つ、ということもあるでしょうし、趣味の世界が広がる、ということもありそうです。また家族や友人に英語話者がいるから、ということもあるかもしれません。いずれにせよ、リアリティーがあるとそれを本気で学ぼうと思うきっかけになることがあるのは確かなように思います。

私は英語の授業と専門の言語学の授業を教えています、できるだけ受講生にリアリティーある学びを経験してほしいと願っています。実は、英語であっても、言葉について学ぶことは、ひいては自分が言語を用いるとはどういうことを考える、つまり自分自身が学びの対象になるということなのです。大学院で言語の研究をするというのは、より直接的に自分自身に迫ることになります。これも1つのリアリティーのあり方です。探究の道に一足お先に進んだ者として、授業を通じて学生の心に何が残せるかを日々考えながら、大阪大学での研究・教育に精進する所存です。



◎マルチリンガル教育センター 英語部会 特任准教授

### **Záborská Schack Dorota 先生**

My teaching experience encompasses all levels of traditional education in Japan from elementary school through junior and senior high school to university. Having been in close contact with learners of various age groups for years at a time has significantly contributed to shaping me as a language teacher and researcher. My teaching career started in 2002 at a private elementary school, where I spent three years as an assistant language teacher. At the same time, I pursued my Master's degree in language education, as well as obtaining a teaching license for both junior and senior high school. For the following 11 years, I taught all English language-related subjects at a highly competitive private junior and senior high school. Professional development has been and remains an integral part of my work philosophy. To pursue further research in language learning and teaching, I decided to move to the university environment in 2016. Since then, I have taught various English language classes, ranging from general language classes which focus on the four skills to English for specific purposes to tailored CLIL classes, as well as specialized classes that were part of an English teacher education course. I pay close attention to conducting all my classes in a way that students not only have ample opportunity for critical thinking and language output but also seize such opportunities week by week. I firmly believe that to secure learning outcomes, language-wise and content-wise, building positive rapport with students and among students, while creating an encouraging and safe learning space is of utmost importance. This has always been one of my core teaching goals. While being sensitive to learner needs within their contexts, both personal and societal, my teaching goals are to help students find sustainable motivation for lifelong (language) learning. Staying relevant in our rapidly changing world is becoming extremely important, as is becoming and being a responsible member of the local and global community. I aspire to be observant, prepared, flexible, and responsive, as well as a motivating and inspiring facilitator of learning.

My research interests lie in language learning motivation, life-long learning, and psychology of language learning in general, but especially positive psychology in SLA, the concept of savoring, the wellbeing of the language teacher and the language learner, language learning in later stages of life, the third age, intergenerational learning, and collaborative learning. I also explore tailored CLIL approaches in language classes and developing critical thinking, speaking, and writing encouraged through and enhanced by reading authentic texts. In my research, I also investigate how experiences revolving around learning foreign languages positively influence wellbeing in the later stages of life, in the so-called third age. I conduct interviews with thirdage foreign language learners and explore what contributes to their lifelong learning motivation, resilience, and grit. I look into their learning strategies, but also their ability to savor the learning experience, and how it all connects to a sense of healthy ageing. My main methodology is narrative analysis, and reconstructing exploratory and explanatory stories that elucidate their learning experiences. Since I see great potential in intergenerational collaborative learning, for which language classes are a very suitable and easy-to-implement environment, I plan to continue this line of research. I would like to collaborate with a team of educators in developing a university of third age that would be adjunct to a regular university both physically and structurally. A central goal would be to enable lively interaction among learners of all ages; as opposed to independent institutions that tend to segregate different generations. Another important line of research that I will continue pursuing is within my language classrooms for university students. As my pedagogical aims are to develop critical thinking skills that are anchored in language, I am particularly interested in ways they can be triggered, enhanced, and nurtured, especially through balancing reading with speaking and discussing opportunities. As I can currently observe positive outcomes from classes in which I implement tailored CLIL approaches, I want to explore and improve them further.

I see my activities as a researcher and as a pedagogue as equally important and intertwining. They are constantly present in my mind and my heart, at my desk, in the field, or in the classroom. It is the highest honour for me to have become part of the academic team at Osaka University. I am truly happy that I can contribute together with you, my dear colleagues, to the betterment and wellbeing of our society. どうぞ宜しくお願い申し上げます。